すという作業に邁進しているかに見えた。読んだ論文の些細ともいえる欠点をこっぴどく批判することもあって，彼の数学に対する感覚を疑う先輩もいた。

あるときパリの街の喫茶店で，グロータンディークと先輩格のセールと三人でコーヒーを飲みながら数学談義に花を咲かせていた。セールは28才の頃フィールズ賞を受賞した天才数学者で，当時代数幾何学ではリーダー格の先輩だった。数学談義のあと，ふとセールが僕の方に向って「広中，お前はグロータンディークのアブストラクト・ナンセンスをどう思う」と聞いた。あたかもグロータンディークを彼の面前でなじるような口振りに，未だ駆け出しの数学学生に過ぎぬ僕はとまどった。セールが立ち去ったあと，グロータンディークは僕に向かって「あと二年まってくれ。金の牛がやって来る」といって目を輝かせた。

後日談になるが，7年後彼がフィールズ賞を受賞したとき，その業績をたたえる講演を引き受けたのは，そのセールだった。ちなみに僕の受賞のときの講演はグロータンディークが受持った。

読書の話にもどるが，本格的に始めから終りまで読む直読に対比して，読むともなく，どこからともなくページをめくっては瞑想にふけるといった方式の眺読ともいえる読書方式もある。

戦後食糧難のとき闇市売を一切拒否して栄養失調で43才の命を絶った数学者岡村博教授は，聞くところによると典型的な眺読タイプだったという。図書室より借りた本を机の上において読むともなく眺める読書だったというが，彼が「わかった」というときには本の内容に関する深い洞察に同僚達は目をむいたという。彼の業績には，その当時の常套手法から割りだせぬオリジナリティが光っており，早世が惜まれる。

ともあれ，読書には様々な型があるもので，どの型がどの型より優れているというものではないようだ。自分の性格にマッチした読書方式が，その人にとって最良であるといえる。

―― 資料紹介 ―― ①

外国図書（大型コレクション）について

昭和57年度外国図書（大型コレクション）購入費により下記の資料を購入し，附属図書館に蔵置しておりますので御利用下さいますよう御案内いたします。

なお，この資料について文学部の梶山雄一先生に詳しい解説を執筆していただきましたので，御利用の手引きとして紹介いたします。

デルゲ版チベット大蔵経

文学部教授　梶　山　雄　一

今回（1982年度），ダルマ出版社刊行の『デルゲ版チベット大蔵経』一部（117巻120冊）が本学附属図書館に購入され，本学のみならず，西日本のチベット学関係者に歓迎されるにいたったので，この書物について簡単な解説を行うことにする。

ダルマ出版社というのは，カリフォルニア州，バークレーにあるニンマ研究所附属の出版社である。「ニンマ」というのはチベットにおいて最古の伝統をもつ仏教学派の名前「ニンマ派」からとったもので，この学派の出身である，タルタン・トゥルク・ラマが所長となって，教育・学術・文化にわたる広範な活動を続けているのがニンマ研究所である。

チベットの宗教と文化に対しては，古くから世界の言語学者や仏教学者は強い関心をもっていて，研究業績も積み重ねられてきている。しかし，とくに最近，チベット・ブームとさえいえる

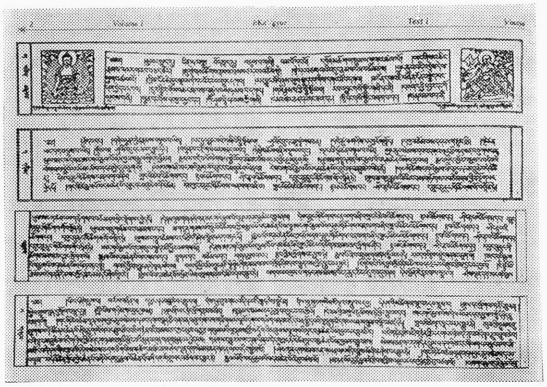
ような現象があらわれてきたのにはいろいろな理由がある。1959年から60年にかけて中国がチベットを解放したさいに，大量のチベット人，しかもラサの高官や諸方の大寺院の高僧たちの多くが，インドへ亡命し，ついで欧米各国へ移住した。これらの人々は現在，世界各地で活躍している。1973年以来，チベット文化圏に属するラダックやブータンなどの諸国が門戸を開放し，各国からの学者や調査隊を惹きつけた。さらに，いわゆるシルクロード・ブームがチベットへの関心にも拍車をかけたのである。

チベットには古くからボン教といわれる土着の宗教があった。これは現在にいたるまで仏教と並んで，あるいは混合して行われている。仏教は，7世紀前半に吐蕃王国を樹立したソンツェン・ガンポ王（581—649）のときに，中国とネパールの双方から導入された。チソンデツェン王（742—797）の時代には，インドからシャーンタラクシタとパドマサムバヴァとの2人の偉大な仏教僧が入蔵し，サムエにチベット最初の僧院を建造し，最初のチベット人出家6人（試みの6人）を得度した。

この頃のチベットには中国の禅宗とインドの中観仏教およびタントラ仏教とが並び行われていて，その間に対立と抗争もあった。シャーンタラクシタの没後，その有能な弟子カマラシーラが招かれて入蔵し，中国僧大乗和尚とサムエにおいて宗論をたたかわせた。その結果，頓悟禅を唱道していた大乗和尚が敗れ，チベット仏教はその後長く，インドの中観仏教とタントラ仏教を主流とするものとなる。

文化の伝播というものは，一般に想像されるよりも，実際は，はるかに速やかに行われるもので，サムエ寺定礎の775年から半世紀足らずの後，9世紀初頭には，現在でも用いられている標準的な仏教サンスクリット語—チベット語辞典『翻訳名義大集』(Mahāvyutpatti)が編集され，チベット人の仏教知識も急速に高まり，仏教経典や論書の翻訳も集積され，仏典目録も編まれた。

興味あることに，ビルマ・タイ・カムボジャ・ラオスなど東南アジア諸国の仏教僧は，インドから



スリランカに伝わった仏教語パーリ語をそのまま用いてきたのに，チベット人や中国人はインドのサンスクリット仏典を自国語にまず翻訳し，その後は原語をあまり顧みなくなる。もっとも日本の仏教徒はサンスクリット語は知らなかったけれども，漢訳仏典をそのまま読んでいたから，どちらの類型に属するか，判定しがたい。

チベット仏教史を述べている余裕はないけれども，チベットでは吐蕃王朝最後のダルマ王(841—43在位）によって一度廃仏が行われた。しかし王は843年に殺され，王朝は分裂，そのまま滅亡する。吐蕃王朝滅亡後，中央チベットは混乱が続いたが，西部および東北チベットの諸侯は仏教復興に努め，リンチェンサンポを初めとする21人の僧がインドに派遣され，1042年にはインドのヴィクラマシーラ寺の座主であったアティーシャ（980—1052）のチベット招請に成功した。アティーシャの指導のもとにチベット仏教は本格的に復興し，隆盛に向かった。吐蕃王朝の仏教を「前伝」というのに対し，復興以後の仏教を「後伝」という。前伝仏教がいわば王朝の仏教であったのに対し，後伝はいわば民衆の仏教であり，多くの宗派が成立してきた。この辺の事情は，日本における奈良・平安の仏教と鎌倉仏教との相違に似ているし，年代的にもほぼ並行している。

12世紀末から13世紀初頭にはイスラム教徒がベンガル湾に至るまでの北インドを席捲し，ビハール州からベンガル州にわたって集中していた仏教の大僧院はことごとく破壊され，インド仏教は事実上滅亡する。大勢のインド僧が亡命してチベッ

トに流入したが，それはチベット仏教にとってはかえって幸いなことであったろう。チベット仏教を大成した大学僧ツォンカパ（1357—1419）は14世紀にあらわれて，ゲルク派とよばれる、その後のチベット仏教の主流となった学派を創立した。

この頃にはほとんどすべてのインド仏典はチベット語に翻訳されていたうえに，チベット人自身の著した仏教書も数多くなっていて，それぞれ集成の努力も始められた。「チベット大蔵経」というのはインドで成立した仏典のチベット訳を集めたものであり，チベット人自身の著作は「蔵外文献」と呼んでいる。「大蔵経」は経典（密教タントラを含む）の集成である「カンギュル」と，論書の集成である「テンギュル」との二大部より成る。

最初の大蔵経は14世紀初めに，ナルタン寺の蔵書に，諸地方から蒐集したものを加えて編集された。ただしこれは墨と筆によって書かれた写本であった。これを基礎にして重複したものを削り，足りないものを付加して，各寺院でカンギュル・テンギュルがそれぞれ確定されてゆく。

木版による最初の大蔵経は中国の明の永楽帝によって1410年に開版され，少し遅れてジャン版（のち，リタン版と呼ばれる）がチベット人によって開版された。しかしいずれもカンギュルだけであった。17世紀から18世紀にかけて，カンギュル・テンギュル両方を含む，いわゆる四大チベット大蔵経が開版された。

1)北京版　康熙帝開版　カンギュル　1684—92
　　雍正帝〃〃　テンギュル　1724
2)デルゲ版　テンパツェリン王
　　カンギュル　1729—33
　　テンギュル　1737—44
3)新ナルタン版　第7世ダライラマ
　　カンギュル　1730—32
　　テンギュル　1741—42
4)チョネ版　カンギュル　1733—43
　　テンギュル　1753—73

この他に第13世ダライラマの命によって1923年にラサ版が開版されたが，これはカンギュルだけである。

版木はかなり大型の，横長の長方形で，横書きで7行あるいは8行に文字を彫っている。四大版のうち最も正確で校正のゆきとどいたものがデルゲ版で，北京版がこれに次ぐ。ナルタン版はしばしばテキストの古形を残す点で貴重であるが，誤刻もかなり多い。チョネ版はデルゲ版をそのまま覆刻したようで，異同が少ない。学者は一つのテキストを読むとき，これらの4版を対照して異同を比較し，テキストを校訂するわけである。

四大版のうち北京版は，1954—59年に西蔵大蔵経研究会によって，大谷大学所蔵版をもとにして，『影印北京版西蔵大蔵経』151巻が洋書風で出版された（本学はこれを2セット所蔵）。デルゲ版版本は日本では東北大学と高野山大学に所蔵されるが，破損摩滅を防ぐため，いずれも公開されていない。高野山版のマイクロフィッシュは出版されたが，必ずしも鮮明でなく，本学は所蔵していない。したがって今回，きわめて鮮明で扱いやすい洋書風デルゲ版影印本が本学附属図書館に備えられたことは，関係者にとって，この上ない喜びである。本学附属図書館にはもともと『ナルタン版大蔵経』の版本が未整理のまま所蔵されていたが，先年，御牧克己助教授によって整理された（ただし3帙欠）。ニューヨークで出版されたチョネ版テンギュルのマイクロフィッシュは文学部図書室に備えられている。したがって本学は，完全とはいえないにしても，今回，四大チベット大蔵経を備えるにいたったのである。

インドで製作されたサンスクリット仏典は，大部分が散佚し，現存するものは一部分にすぎないので，学者はチベット訳と漢訳に頼ることが多い。『チベット大蔵経』は漢訳以上の分量をもち，しかもその翻訳は原サンスクリット語の直訳体で，漢訳よりも正確である。「チベット大蔵経」が尊重される所以である。

本学附属図書館はチベット蔵外文献をも逐次購入しつつあるから，有数のチベット文献センターとなる日も遠くないであろう。終りにお願いしておきたいことは，本学所蔵のチベット文献はいずれも貴重・高額なものであるから，使用者はとくに取り扱いに注意を払われたい。また一人で多くのテキストを独占使用することのないようにしていただきたい。